

# 眞 生

第六卷 第六號



□ 模倣と眞實の相違は恰も生けるものと死せるものと相違である。だから、昔からほんものを嫌ふて似せものを好むものはない。これいかなる場合にも眞實は模倣より勝れているからである。

□ 然るに世間このことを知らないのではないけれども、いつしか之を忘れて、よく人のまねをする人がある。

□ これ主として、自らもその眞實を喜ぶが故に何ぞかして之に近づかうとするところに、我知らず、自ら之を模倣するに至るのであらう。

□ 乍然、如何なる場合にも、模倣は眞物に及ばぬことを知らなければならぬ。模倣はどこまでも模倣であり、決して眞物ではないのである。

□ 茲に於て、私達は一刻も早く模倣の生活を捨て、眞實の生活にならねばならぬ。人の一生は模倣の生活であつてはいけない。一切が創造の自己の本心の生活であるべきである。

□ 従て眞實の人生は模倣の生活から、眞實の生活に生るにある。人の生活をまねるのでなく、身自ら自己の生活を創造せなければならぬ。

□ されば又よ、私共の生活は一切が眞實への生活であるべきである。あらゆる歴史の展開も、あらゆる先覺の出現も、要するにそれは一切自己が眞實の生活であればならぬ。

□ 従て、私たちは決して徒に先覺の生活を仰望して、やがて各人の佛國を建設すべきである。

□ 恰も法藏菩薩が自らに四十八願を選択して、そこに佛國を建設せられたやうに如来中心の念佛の生活も、やがては各自の佛國建設でなくてはならない。

□ そこに、模倣と異なる眞實の世界がある。生ける人としての天地がある。友よ私達は先覺の模倣に生きてはいけない。よろしく先覺の上に更に一步を進むるの覺悟があるべきである。(念)



# 目次

- ◇蛙の臍 尅 子
- ◇耳四郎の念佛 土屋観道
- ◇病窓より 安田愜順
- ◇眞生の喜び 小熊啓太郎
- ◇吾朋便り

□私達の一生も永いといへば長いやうにも思へるが、一寸居  
睡りしてゐる間にも二時間三時間が忽ちフツ飛ぶことを思ふ  
とホンノ東の間であります。態々人間として生れて来て何を  
して果つべきか。

□この大本が決まりませぬ癖に衣、食、氣、はなつたり、容貌が  
氣になつたり金、氣になつたり人の昇進が氣になつたり、コ  
セ、クサ、として腰の座らぬヒョロ、生活をしてゐます。

□「何をくよく川端柳、水の流れを見て暮らそ。」本當に私  
達は見處が間違つてゐました、悠久に流れ、て盡さぬ自己生  
命の流れを先づ見出して、其上に生活を建てねばいかなかつ  
たのです。飯一杯喰べるのも自己を悠久に生かすが爲め、下  
駄の齒入れをするのも、澤庵一本賣り歩くのも、眞實永遠に  
生きるが爲めである、人の禪を一生洗て果つるのも、醒め來  
て見ればそこに眞實の生があるのではした、何をクヨ、して  
ゐるのか、何を怨み、何を羨んでゐるのでしたか。

□如來様は一人も残さず「いとし兒」として生かして下  
さいます。「お前だけは割前が悪いが辛棒しろ」などと泣寝り  
は一つも注文してみねぬ、皆な一樣に最上の事をさせながら  
最善の生を送らしてゐて下さい。

□十が十、不幸に執りつかれてゐると思つてゐる人も、必ず十  
幸福を恵に持てゐます、十幸福を持てゐる人も必ず十不幸な  
点を裏に備へてゐます、世に幸福ばかり持てゐる人、不幸は  
かりに沈んでゐる人として一人もありません。不幸の儘で幸  
福であり、幸福の儘が不幸であります。

□眞の幸福とは斯かる眞實の智眼を開いて、眞實の生活にい  
そしめる人であります。

# 蛙の臍

▽見つけたり蛙に臍のなきことを、と云ふ句があります。

▽當り前のことを當り前に發見し、當り前に生きてゆくことが藝術であり信  
仰であります。それを何だか一大神祕を發見し、不可思議術神通でも現することが宗教のや  
うに誤解せられて居ります。

▽神祕といへば「蛙の臍のなきこと」を見出した程、大きな神祕の發見はありません。花は  
紅、柳は緑といひ乍ら本當の紅の花、緑の柳を見て居らぬのではないでせうか、如來様のみ  
恵とみ力どが花の上、柳の枝、蛙の臍の上にも輝いてゐることを、本當に知らんでゐるので  
はないでせうか、だから先づ「發見」する必要があります。

▽私達は自分で自分の奥を知りませぬ。平常の何でもない時は餘り悪い人間の者もないが、  
一つ調子が狂ふと何處まで意地悪く、慾深く、嫉妬深くなつてゆくことが自分でもわかりま  
せん、奥の手の上に奥の手が出て來て、いくらでも悪性になつてゆけます、本當に自分なが  
ら怖ろしい程です。

▽それかと思ふと又一念にスバツと廻心して遷善して了ひます。恰度電燈が今点いてゐたか  
と思ふと忽ち消ね、消ねてゐたかと思ふとパツと点いて明煌々あたりの塵を拂ふやうなもの  
であります。だから釋尊も私達の心を「藏」だと言へられましたが、種々様々なるものを内に藏  
して居ります、だから偉いからとて自慢も出來なければ、淺間しいからとて悲觀することも  
要りませぬ。

▽「善人は善人ながら念佛し、悪人は悪人ながら念佛せよ」と云はれたのは、此の人間の本  
質を突きとめた上での眞の自覺だと思ひます。善だ悪だの問題でなく、眞實如來さまに歸命  
し、佛のみ力を全分戴いて生きてゐるか否かの問題であります。眞生とはこの如來さまの心  
を心として自らが生きる姿であります。(尅子)

# 耳四郎の念佛

土屋 觀道

耳四郎といへば本名を天野四郎と申しまして、河内の國の住人で、もどく強盜の張本人として、其の悪名の高い人であります。或る日、法然上人のもとに忍び入つて、ものでもどらうと思つたものが、その上人の集りの座の椽の下にかくれていたのですが、その間に上人の御説法をぬすみぎ、して、遂に信仰に入つた人である。乍然傳ふるところによれば彼は信仰には入つた後も、仲々に從來からの盗み心が失せなかつたと見えて、相變らず其の盗みが絶えなかつたと云ふことです。

私はこのことを聞いてから、とみに耳四郎のことが氣になりだして、どうしてそれが止まなかつたのか、またどうしてそれを止めなかつたのか、さうしてまた法然上人始め、さうした人々が耳四郎に對して、どうしてそれを止めさせやうとなさなかつたのであるかと云ふ、色々の疑問が起らざるを得ませんでした。そしてまたそれが私共念佛者にとつて、之を如何に扱ふべきであらうかといふことに對して色々の考へをめぐらさざるを得ないものがありました。

何となれば一見、念佛でも信するほどの人ならば已に善人であるとも見るべきである。然に念佛者ともあらうものが、其後人のものを盗むなどと云ふことは果してそれでもつて眞の信者と云ふべきであらうか。かう思ふとき、人の物をぬすむ位の人ならば、それは眞實の信者であるとは見られないではないかと云ふやうな心が私共の心に起りうるやうな点もあるからであります。又、念佛申し乍ら盗みをするやうなことが許せるなら、念佛そのものが果して人類の生活に必要なであらうかとも考へられるからであります。

乍然私は耳四郎の念佛を靜にきくに從つて、初めて心からなる耳四郎の本心を知り、更に限りなき同情を彼の心の上に注ぐやうになりました。彼はむしろ私共に對して、最も尊き先覺の第一人でさへあつたのでした。さうして、また、それが如何ばかり人類の宗教に偉大なる力を興へるものであるかをも私共に示してゐるのであります。言換れば法然上人の宗教がむしろ耳四郎によつて凡夫の宗教を代表し併せて釋尊の佛教が更にそれによつて、眞の光をさへ添へるものと思はるゝやうになりました。

## 二、

聞くところによれば耳四郎は入信の後、常に高聲念佛して、その聲が更に止まなかつたと云ふことです。それにもか、はらず、彼はひそかに人の物をとることも亦止まなかつた。初めのほどは周圍の人々も之を知らなかつたのです。乍然その度重なるにつれて、周圍は之を發見して、それが耳四郎の仕わざ

であると云ふことを云出しました。そこで、今やそのことが多くの信者の間に問題とされました、而も彼の素性を知るものはそれを以て一層彼を恐れ、彼を惡むやうになりました、彼に近づくものも段々になくなつてしまいました。その時耳四郎の聲は段々と一層念佛の聲に強く變つて行きました。乍然それにもか、わらず、彼の行爲は一方益々物盜む行爲となつてそれが盛んになつて行くのでありました。そしてまた、耳四郎の姿はそれにもまして愈々さんで行きました。彼はやけくそにでもなつたのでせうかその頃、法然上人の門下には幾多の道俗が群をなして集りました。中には學ある者、徳ある者、又大いに義に勇む人々も多かつたのであります。だから此の耳四郎の行爲を見て、心から喜ばぬ人も亦決して少くはなかつたのでした。それも、單に耳四郎の行爲のみを見て起すところの惡みではありませんでした。近頃念佛さへすればどんなものでも救かるのだと云ふので、多くの人々が貴賤老若を問はず、雲のやうに集りまして、中には盗みすることも人殺すことも、皆宿業の然らしむることだからかまはない、念佛さへ申せばそれでよいではないかと、大手をふつて之見よがしに、其のふしだらな行爲さへする人もあつたのですから、併てそれを慨したものでした。

そこで信者の中のある一人が、耳四郎の行爲をも、てつきりそれだと見たのでせう。彼は大いに其の非行を惡んで佛法を亡ぼすものとし、又宗祖上人の念佛興行を大いに害するものとして、之を心から惡んだのであります。而も其の惡みは恨みとなり、怒となつて、彼を亡きものにしようと思へるやうになりました。

或る日のこと、彼は耳四郎を殺さうとして飲屋に彼を誘ひ出しまして、たらふく彼に御馳走して其の酔倒れるのを待ちました。それとも知らぬ耳四郎は近來にない友のあしらいに、心もゆるんで喜びに充されました。念佛も一層に嬉しくて、思ふ存分に好きなお酒も心からたらふくいた、いたことせう。彼は日頃から多くの人にさいなまれて、己が非行の苦じさに、生きる目もないやつれた顔に初めて春の日のやうなうららかな如來の大悲を一ぱいの好きなお酒に心から感謝したことせう。人は自分でも、ならぬとき、その心に同情して、心から自分の心をなぐさめてもらうほど、眞に心から嬉しくも亦有難いものはない。私は此の耳四郎の一ぱいの酒に友の友情を喜んで日頃のなやみとつかれとを眞に心からなぐさめてゐるかと思へば私の心には涙なくしては之を見ることができぬのであります。かくて耳四郎はたらふく御馳走になりました、やがてよい倒れてしまいました。全く前後もわからぬ有様であります。彼は今や全く自分を忘れて、眠りの中に落ちて終つたのであります。

丁度その時、彼をふるまつた一人の友は、時こそよけれと一刀を引抜いて耳四郎をまつ二つにしやうとしたのであります。振りかぶつた一刀があはや耳四郎に落ちたかと思ふ一刹那、友は忽然として仰むげにひくり反つてしまいました。驚くべし今までの耳四郎は金色の彌陀でありました。友が驚いて再び之を眺ればそれはやつぱり耳四郎の姿です。何と云ふ恐しい莊嚴の姿でありましたらう。而も彼は尙

其のいびきするいびきの聲が念佛の聲であつたと云ふことです。

茲に友は驚きの爲めに胸打たれ、心から己が殺害の非を悔いて、耳四郎にその罪を謝しました。此のときの耳四郎の言葉が私はなつかしい、そしてまたそこに私は彼の爲めに永久に泣かざるを得ざるものがある。

「友よ、許して下さい。すべては私が悪いのです。ほんとうに何としたことでせう。私はかねてから、自分の非行を私は知つてます。さうして、私はその爲めに私自身にいか泣いたことでせう。過ぎし日の昔を思ふてさへ、私の半生は身ぶるいするほどのあさましさでありました。人を殺し、物を盗み、爲すべからざるこのあまりになされて、私の身は今やこの世に此の身のおくところさへありません。然るに幸いにも、今や法然上人に誘はれて、漸く念佛する身となりましたのでせめて、之から先きなりとも少しの罪も造らじと、心をかけて一心に念佛は申すもの、あ、何としたことでせう。それでも私のこの心は昔にもまして尙盗みの心が止まぬであります。行てもよいなど、思ふ心はつゆないのでありますけれど、それでも止まぬこの心、何とした私のあさましいこの根性でありませう。友よ、願くはこの罪を許し玉へかし。あ、私は何としたならばよいことでせう。ほんとに人にもすまぬ、われにもすまぬ、折角に教へを聞いたかいいもないこの私、反て如來の慈光を妨げ、上人の傳道さへも私は知らず知らずに邪魔してゐる。ね！ 友よ、私は私のいたらぬところを百も承知でありました、而も之を止めや

うとしたことも一度や二度のことではありません。而も猶昔にかはらぬこの盗みの私であります。お！ 友よ、今私はどうしたならばよいでせう。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……おう、如來よ、今や私は、あなたにたよる外には道がない。もう私は私自身さへ、私を信することができぬのです。何となれば、己に私は私自身に私の思ひを止むる力さへないことを知りましたからであります。如來よ、あなたはかゝる私如きものでもお助け下さいますか、私はたゞそれが何よりのたゞ一つのたよりでありますお、おそろしき盜の心、之が私の生得の報いでもありません……」

私は此の耳四郎の言葉を聞いて、衷心から泣かすにはおれませんか。何といふ純な耳四郎であることよさうして今や私は、その中に彼が眞生の世界を眞に見せられたやうな氣がします。

三、

靜に彼の告白を聽きますれば、彼は決して自らの非行を彼自らによしとして、やつてゐるのではありませんでした。否それどころか、彼は入信以來、衷心から其の非行を悲んで身自らにも之を止めやうとすることは彼の告白で充分であります。否それどころか、彼はそのことについては人一倍の努力を以つて、其の悲しみとなげきの中から自らも自らの非行を改めやうとてゐます。否そればかりではない、彼はこのやるせなき自己の罪ふかき實觀の奥底よりぞ、眞に如來の大慈を仰ぎ、如來の大慈に全心の祈りを助け玉へと献げて居つたのであります。今や、彼は自分自身をして自分自身に任かすこの力さへ

なくなつて、一切をあげて如來の救いを念佛の中に求めておつた、正に真劍の人であつたのであります。言換れば彼は已に改心の人でありました。而も改心しても改心しても、止むに止まれぬ自己の煩惱をどうしませう。彼はたゞもう一向に念佛して如來の救いを求むる外に、眞に生すべき道もなかつたのであります。言換れば彼はたゞ僅に念佛によつてのみ、眞に生きることができたのに過ぎないものでありました。

あゝされど、友よ私共の眞の眞の人生は果して何でありませう。私共は耳四郎のやうな、盗みの心は或はないと云ふかも知れぬ。乍然、私共の心の底に奥ふかくい入つてゐるものは果して何でありませう。或は單に盗みの心ばかりではないかも知れません。或は怒り、或は偽り、殺生、烟乱、一として、之を心の奥底に持たない人がありませうか。

念佛なき人生の一生、私共ははたして、耳四郎を笑ふことのできるほど果して淨きものでありませうか。

更に、承るところによれば、彼は晩年に到つて、遂に盗む心も止んだと云います。而もそれが爲に衣食に窮して、京を去るの止むなきに至り、相模の河村に、舊友を尋ねて一生を彼の地に働いて終つたと云ふことです。彼の永い間の惡僻は遂に彼の姿や形までも恐ろしい相にしたやうです。だから誰もが、殆ど彼を見て彼に近づくことをしなかつた。従て衣食の道に窮したのも亦止むを得ぬことであります。従

て食ふに食なく、住に家ない彼の生活には、その苦しさのあまり、永い間の性僻と共にときたまとして性來の盜にその手が行つたと云ふことも、或は偽りのない一つの事實であつたかも知れません。乍然、如來を頼む彼の一念は、寸時も離れぬ常念の相となり、時々刻々の如來の靈化は、どるにもどれぬ自己の本心の光りとなつて、彼は眞正無垢の純淨の人となつたのであります。そこでいつしか盗みの心も今や起さんとして起すこともできなくなつて來たのであります。乍然、その代り彼は今や食ふに食なく、住むに家なき全くの無一物者となつたのであります。而て彼は遂に京を去るの止むなきにさへなりました。

乍然、何といふ莊嚴の姿よ、私はこゝに亦、耳四郎の偉大なる求道、莊嚴の光を見ます。さうしてまた私は、そこに聲をばりあげて、動哭せずにはおれないものがあるのであります。

友よ。私はどうして、こんなに泣かずに居れないやうに弱い姿となつたものでせう。

今や、私の心には一切がどがむることのできない心になりました。否、どがめながらも、どうしてもどがめることのできぬものが私共の心の奥にひらめいているのを見るのであります。

#### 四、

それにつけても、我がなつかしき法の友人よ、私達は眞に心からなる幸福を身自らに感謝せずには居られない。それは即ち、何にかへ難い如來の限りなき御救いでありませう。我等に如來なかりせば、今

頃の私達は、今頃どんなになつていたことでありませう。止め止めんとして止むることのできない、お互の煩惱を、力なき我等に於て、如來の救ひなかりせば何で、眞生の力を得ませう。

乍然、友よ、私達は各自の煩惱をみたすことを以て能事をはれりとなしてはいけぬ。若しできることならば、及ばず乍ら、私達も、少くとも耳四郎の生活にならへて、一刻も速く、寸毫の罪なき眞生の人とならねばならぬ。さうして、また、若し私共にできることならば、それによつて私達は幾多の妻や兄弟に對してもつまらぬ世話をかけぬやう、心からなすべきことではないでせうか。

(二、五、二〇 午後五時)

觀道傳道日割

四日	まで	柏崎灣在
四日夜行にて	五日	朝歸京 九日東京發大阪へ
十日より三日間		大阪貞松院
十三日		全 長圓寺
十五日		尾ヶ崎圓平寺

十六日	神 戸
十七日	大垣円通寺
十八、九日	四日市中野氏宅
二十、二十一日	名古屋崇徳寺
二十三日	焼津光心寺
二十四日	静岡市粟生氏方

病 窓 よ り

安 田 恢 順 拜

御上人、暫らく拜眉を欠き候、今日尙床中にあり既に一百餘日を過せり唯我同胞と共に活動出来ぬを嘆ずされど亦共に上人の御話も承はるご信じて未來を喜び候  
別記一二三四病苦の閑の走り書き何が書けしや一度御讀下し願上候何卒、御嬢様年幼く体軟なり幸にして御体大切に御保育あらんことを、上人の健康を禱るご共に御令園の幸福を禱る。

(觀道附記) オー涙なくしては讀めぬ此の手紙、願くば此の至心より出づる我道友の御心を私は我が眞生の道友と共に拜見して、師の安態を祈るのであります。

昨日の雨天に引き變へて今日の天氣は日本晴れ此の病床へ聳すへたる寒む空に命ちカラ、雪中にツン立ちし牡丹の株、今はあの様に幹からも枝からも葉が青々と繁つて居る、アラ落ちた五六日前にも初咲の花片が落ちたが今最後の色を飾りし花片、一片二片三片と落つる、も早や花の牡丹で

はない葉ばかり見る牡丹の株、同じ花園に植つる芍薬、ほころびそうな彼の一蕾、花の片々皆な力である、赤色のも白色のも薄赤のも各々血氣盛りの青年の様に！見て居る間にバツト開く、笑つて居るやうじや嬉しさうに此れから實を結ばんと満腔の力に充實して居るやうじや、何處からとなく飛んで來た一匹の蝶、奇麗な蝶ぢや、アラ又一匹オーつがいらしい仲よく遊べ、オーあの花にとまつた一つはあちらの花にオー花蜜を吸ふて樂しむ蜜を取つても花は害せぬ、法衣を着けて居ても佛を害なふ僧侶があると、如來金口の法密は何程取つても、少なふはならぬ、害はれせぬ、否、却て如來の美は顯はれる眞實が出てくる、佛子一佛を増すのである。心の用ひやうにて世は地獄ともなる極樂ともなる。藪の中に今日は澤山荷が出

ました、それは勢ひよく數は一十七八本と小さき  
雜僧の喜びの聲よ。

滿三年前、足掛け四年前の歳に脱疽病にて切斷  
せられた此左足！今年は同じ病に犯されたる此の  
右足！ オー痛み出した又烈痛？！ 針で突くや  
うだ、錐でもむやうだ、足背の神経は波をなす、  
足根部は、はせ破れる様だ！ 神経は膝部を突きと  
をして腰部に眞痛する。腸は巻きたる繩を寸斷す  
るやうだ、脳は乱だる、全身はをどる。空を握  
んで七轉八倒！ 痛い！ 苦しい！ この苦惱は人業で  
ない様な思ひがする、惡魔の仕業と思へば鬼魔が  
顯れる、鬼神と思へば鬼神が出づる、過去の業か  
と思へば過去の業とも思へる、思つたやうに顯れ  
る、アーこの所見境涯は所思より出づる、この苦  
境も、苦思も、苦体も、皆んなみ佛の光の裡、何  
んたるザマ悪い事でアロー、普通の人に見られた  
ら何處に僧侶としての姿がアロー、耻かしきこと  
無限である、されど苦は苦として、どうしても免  
がる、事は出來ずに苦しまねばならん、オーみ佛  
は何もかも皆、御存じである、如來は現に我が前

細やかに嘆せらる、のである、イザ立ち行かん、  
如來の仕事の萬分の一でもこの体の經讀する限り  
つくしてやみなん。

アーこの痛み、立つこと不能、恐る、な嘆くな  
今は立つべき時ではない、十分十二分靜養すべき  
時である、せき止められし水は大堤を打ち破る方  
がでる、立つべき時を待て。

過去の私なれば過去のやうに切斷するのである  
單なる痛苦にこらへかねて……されど今また殘存  
するこの片足を切斷すれば、そは死の身体である  
ならば苦痛はしのべるだけ忍んで安全を待たねば  
ならぬ。

法藏菩薩としての如來は「諸苦毒中忍終不悔」こ  
そ尊いのである、この片足は命にかけても切斷は  
せぬ、南無阿彌陀佛！、しかも當然癒ゆる  
と云ふ手懸ける人もあればこそ、天に口なし人を  
して云はしむる、オ、然り、多くの人は切斷して  
命を保てと云ふが我れは壽を尊として切斷はせぬ

に在しますのである、この蕃境界は當然經過せね  
ばならないのである、經過せねば如來はないので  
ある、然るに如來は現に在します、如來は過去久  
遠劫の昔より、我れを光の中に進轉せしめ給ふて  
在しましたのである、然るを我れはその常恒不斷  
我れを離れ給はざりし如來を遠方に思ひ遠くに求  
めたのである、我れは光と人の裡である、光は我  
れの裡に満ちてゐる、オーこの我れは我儘にして  
過去の經驗界に任せしなれば六道出離の縁なかり  
しものを否、今後も亦捨置きなば凡夫で有らねば  
ならぬ、この凡夫の我れはトテモ逼途の法では成  
佛は出來ない六道輪廻の外ないのである、只々如  
來の御はからいに任せ如來の恩寵に依りてのみ如  
來たり得るのである、如來の方の加はる處に我が  
此身は如來の活力を得るのである、如來としての  
仕事、この身体が如來のみ旨に叶ふ働きは如來我  
れに在しませばなり、南無阿彌陀佛！、如  
來の光明は見つむれば見つむる程、アザヤカであ  
る方あり情けある、尊き凡ての資料にて在します  
「名体不離」辨榮聖者の如來十二光の聖詠は愈々

と忍受するのである。オ、尊きは光明に充ち給ふ  
如來である、光りと力とに活かさる、我れは我が  
身、又尊いのである。身體八膚之を父母に受く敢  
て毀損せざるは孝の初めと云ふ言葉の意味に尊い  
のである。

「名体不離」誠なる哉、念佛を離れて助かる道は  
ないのである、アミダ佛を外にして行くべき先は  
ないのである、求むべき道はないのである、行住  
座臥、凡てを選ばず念佛は出來得るのである、臥  
て居ながら念佛は稱へられる、苦しんで居ながら  
よく念佛せらる、眞に立居起き臥し其ま、に如  
來は我れを離れめさぬのである。

南無阿彌陀佛！、窓外のジキタリスは小  
さき鉢に移植せられ乍らも勢一杯自性を開輝して  
盛んに咲きつ、上へ上へと延びて行く。

本來の面目坊の立ち姿

一目見しより戀とこそなる

(完)



# 眞生の喜び(一)

鑄工 小熊啓 太郎

## △人形▽

乳幼児愛護デーに、始めて子供を幼稚園へ連れて行つた。丁度お節句であり、青い目のアメリカ人形の歓迎會であり賑かだつた。はにかみ屋の子供も、元氣にうれしそうだ。今度幼稚園の生徒にしてあげやうか」と云つたら軽く頭をコックリした。

戻りに岩下さんへ寄つて澤山の人形を見せて貰つた。

「イミちゃんの母さんから人形を戴いたよ」そう云つて可愛らしい、青い目の人形を抱いてきた。本當にうれしそうだ。

足が地につかないやうな様子でトン／＼歩いてゆく。兩手で人形を強く握つて、その手をズツと自分の前に伸ばして、人形の顔をのぞき込み乍ら何度も躓いて歩いて行くのだ。私はそれをうれしい氣持で見歩いて。いゝものだと思つた。本當といふものは全くいゝものだ。あれまでになれる心、どうして尊く思はずにはをれよう。私は熱くなつて祈り乍ら、フトあの時分を思ひ出した。あの大雪の中に、先生に依て、慈光に觸れさせて戴き、眞生を得た時からの私の心は、丁度この子のこの氣持だつたのだ。歡喜

勇躍——その姿を今、この子に見る。熱いものが頬を流れる——

吾々が、この子のこの心をつい、ものだと信じ信じただけでなくその通りの心になれ切れたらどんなにいゝかと思つた。

お互が、半死半生の様な、なまぬるいこの人間同志の關係が、必ずいゝものになるのに。そうなつてこそ始めて正直とか純眞なものが人間に満たされるのだ。甦つてくるのだ。光明が、けれどそれはだめな事だかも知れない。何故ならば、

自分達の都合の善悪で損しない程度で、善い仲間入になつた様な顔をしてゐる人間が餘り多過ぎる——。お前もその仲間でないか思ふ時、少し淋しくなる。しかし、私達だけは進む、私は進む正しい一線に向つて、しかも最初の一線に並行すべく。慈光を我身一杯に恵まれ包まれ乍ら本當の正しい一線に向つて進む——。

## △赤ン坊▽

幼児の成長、動作を注意して見てゐると、ホントに涙だぐましくなる。如來様のやうだ。僞ごまかさない。一より無い。そして一よりいらぬ「本當」の美しい姿が曉の明星のやうに強く煌く煌いてゐるのがすぐ見れる。純眞無垢だ。一生懸命だ、一生懸命な力でグン／＼成長しようとする心だ。

私は今迄嫌いな子供が、本當に大好になつた。幾千万圓のサロンの名畫彫刻を見るよりも赤ン坊の姿を見てゐる時にシミジミ

## ▼吾朋便り

口越後柏崎にて 觀道

今日は六月の二日です。昨日眞生の原稿ができたので、今日は吾朋便りを書くことになりました。當地は全く東京の四月中旬頃の氣分であり、自下先月の廿九日から引つゞき別時三味會であります。當地の道友の熱心なので私までおかけて精進させられる嬉しさです。

先々月大阪の別時を終つてから、大垣、名古屋を経て佐屋の黒宮平八氏の御宅の三味會にまゐりました。氏は入信以來毎年五月に一回の三味會を催してゐられますが今年に丁度その七回記念に相當するさかで、例にも増して一層の精進でありました。集る人々も可なりになくさんでありましたが、今度の三味會は殆ど純信の念佛會さもなくば念佛中心の集りでした、かうした氏の純信さ全く無我なる道友への御奉仕は私共の心から感じて止まぬところでありました。

次に佐屋を終つて、翌日三河の岩月氏のところに一日一夜の集りに招かれましたが、そるる此の地方も道友ができてさうです。學母

町を中心にならぬ同志ができました。次に焼津の集りを経て、急ぎ東京に歸りましたが家内を始め二人の子供に迎はれたのは之も亦如來様の御めぐみでせう。一家の平和、夫婦の和合、親子のむつみ、私は近頃になつて之等のなつかしさをしみじみ感ずるやうになりました。むしろ合掌せずにはゐられない各々の光が輝いて見れるのであります。

學際におこころ六七日、再び私は北越の地に旅することになりました。始め柏崎に二泊それから見附町の新田で三日間の三味會、それから南鯖石で三泊、再び柏崎に歸つて七日の三味會に列してゐる次第であります。近頃の越後ば再び私の爲めに慈光宣傳の天地として眞の使命が傳へられさうになつて來ました。各地とも、多くの青年有識の人のみを中心とする近來にない一大光りであります。

友よ、之から段々熱くなつてまゐります。はれ、どうかお互に身体を大切に、健康にしたいものです。そして願くば共俱に道の爲めにつくしませう。「眞生」へもどうぞ皆様の御感想を出して下さい。そしてまた、此の「眞生」を各自自分達のものとして道友の方々へもすすめて下さい。それにつけても近頃

幸福を感じる。「本當」に打たれる、頭が自然にさがる。合掌する。  
玩具をつたら泣いてゐる

お菓子がほしいとダツ子さん

お童謡をきいてねむつちやつた。

私はこんなうたを幾つか書いて、縣社會課から賞金を貰つた。  
それをみんな家中の者に分けてあげたら心が清々した。

△露 草▽

朝、草にめぐまれた貧しく清い美くしさを思ひつ、道を歩くこと  
限り無き幸福を感じる清く貧しき者に最も、本當に近いものを感じ  
る。ことに露をおびて静かに光る草の葉を見る時、心の中から  
平安だ 静かだ。ホントに生きてゐると感じる。

生命ある野の草、ジツと、その前にたゞずんで合掌する、ムク  
くと腹の中から、喜びの力が湧いて来る。感激の涙  
此處にも如來様がいらせられたのだ。力と、恵みに満ち満ち給  
ふ如來様が。

私は静かにスケッチブックを展げる、そしてどうして今迄この  
尊い姿を雑草として、一顧の價值を認めなかつた。過去の自分を  
淺間しく不思議に思ふと同時に、現在の幸福を感謝する。自然を  
見る眼を開けて下された如來様よ、本當に有難たう御座います。

各地から「眞生」の愛讀者が急にふへて來まし  
た。こは何よりも喜びです。僅に年に壹圓で  
す、毎月一冊八錢にも當りませんが、それによつて得るこころはきつこ十錢や壹圓で得ら  
れるものではないと信じます。押買して金を  
貰ふ爲めではありせん。之によつて、眞の  
道友を得たいからであります。

▼大阪 T氏より

土屋上人

御上人には御變りもなく無事御巡錫の事を  
久々振りにて五月號眞生に依りて承り限りな  
き喜びに私の胸は波打つて居ります、昨年拾  
月壹圓様方に御別いたして以來あまりに長  
く御無沙汰をいたしました、然し私は常に念  
佛の中より御上人始め皆々様に御會いたして  
居りますのでか、久敷御無沙汰にも何だか  
少しも御無沙汰をしてゐた云ふ感じがしな  
いのです、之は私の心の惡道の故でありまし  
ようか、そして此の長の御無沙汰を謝せれ  
ばならぬ云ふ心にもならないのです、そう  
して常に御會してゐる様な心地がしてならな  
いのです、これは實に許りのない私の心です  
御しかりなく御笑下さい。

只今ペンを取りまして書き出しますと書く

事のあまりに多くて何から申上るか頭は迷  
つて何物も出て來ません、

御多忙中の御上人に長い御手紙を然も讀み  
難ひ文章にて申上る事を心から失禮に存じて  
居りますが暫らく私の筆の動くまゝに書して  
頂きます、どうか御許被下い。

昨年十月二十二日私は第二回南洋事業を實  
行すべく小さい帆船(發動機付)を手に入り船  
員拾名と共に傾乗して遠く南洋まで浪花の  
港を後にしたのでした、當時は事業に對する  
成敗は私の頭には少しもありません、只自分  
が身命を賭して成す事業の一端に着手する事  
の出來た喜びで私の胸は一杯でした。

此の喜の私を乗せた小船は下關を出海を  
越へて台湾海峡に出たのです處が九州を去る  
約百五拾哩と云ふ處にて大暴風に出會あつこ  
云ふ間もなく柱は二本共折れて一本は海に一  
本は船に落ちたのです、發動機は大波に持ち  
こたへる力もなく時既に故障を成して居るの  
でした、船員一同は皆色を失つて茫然として  
居たのです、眼に入る物は高い波の限りなき  
潮原半町でした、船は最早一歩も自分の方  
には動く事を許されないので、然し此の時  
も私の心は少しの不安も又恐怖もありません

でした、それは實に不思議な程落付ていたの  
です、私の口よりは絶す念佛がそれはあたか  
も弊樂家の特意の聲の出る様なほれやかな心  
地に出て居ました、そうして私はそれ迄にな  
き体験の喜の念佛の人となる事が出來私の頭  
は冷利に澄んで機長に機械の應急修理に就而  
的確な命令を發する事が出來自分と共に之れ  
に努力して漸やく修理をして九州の五島列島  
の玉之浦と云ふ處に避難をし、にて修繕を  
心置きなくし拾日餘も天候を見斗つて再び出  
發したのです。

台湾迄七日間の航海を續けて居ました、丁  
度五島を出て五日目の朝でした、私は平常の  
通り日誌を書いて居るに何となくけむくて仕  
方がありません、何思ふこともなくふと後を振  
り替つて見ますとちらと赤い火の石油タンク  
の上に走つて居るのです、私は此の瞬間あ、  
もう駄目だと思つたのです、救助ボートを下  
さし非常信號器を積まして船員を避難させ自  
分は運命の行くまゝにこの燃ゆる船と共に  
に居様ボートはどうしても人員全部の集容を  
許さぬのだと最後の決心がそれはほんの瞬間  
に私の頭の判然として來ると同時に消火、船  
員一同を呼び起してブリツチの上にて皆の者

に命令を下しました、デッキ破かい、石油タ  
ンク注意、船底ブルツ(船底に少し斗り水が  
嵌入つて上の油が浮いて居ますので此の油に  
点火すると最早絶体絶命になるのです)注意  
カパーをせよ、破カイ急げと云つて居た私は  
知らず船員の振り上げつ、ある大斧をもぎ取  
り自らデッキの破カイをする驚く程の力に  
てたちまち破カイは出來ました之れは、こゝに  
火を集めて消火せんとする私の考でした、そ  
うして水にと命令をし火は難無く消火出來ま  
した、此の間五分足らずの出來事です。

そして台湾に着き八夫を積んで南洋に出  
掛ました、時には暗しように乗り上げるやら  
大風の爲に帆を取らるゝやら實に今思出して  
身の毛の立つ様な思をして目的地に着き作  
業開始二週間にして最早作業工事を中止せざ  
るを得ない事件に出會、台湾に販り今度香港  
港に行きました、此の時も實に生死の中を二  
度越へた様な思をして香港入港いたし、こゝに  
て船を賣り拂つて來ました、此の間實  
に七ヶ月宅にも充分に通信の出來ざる爲に家  
族のものは實に心配してゐました、それと今  
度の事業に就而少からぬ無理をして居たもの  
ですから宅では實に赤貧洗ふ様な状態を過し

爲に愚妻は何時もはにかみやにてあまり人さの應接をよせないものでしたが一家の主婦とし又子供之母として私より不吉な通信に胸を痛め乍らに生ん爲に或實業家の店に會計として移りて居ました、あのやせこけた身体でよくも出て来たなこの事を下の關迄出迎に來て聞かされた時に私は涙なしには居られませんでした。

然し私達は七ヶ月目に下の關に出會つた時かゝる悲壯な生活をつゞけて來た日迄にもか、はらず、何さなく顔に希望の輝いて居る事を發見し之れば皆上人よりさすかりし信仰のたまものだと互に相ようして涙の中に喜びました。

今度の此の悲壯なる大失敗を得た私は歸宅後宅に平和の光明の輝々としてゐるのを見出し限りなく喜んで居ます、百萬の富もなにかせん私の心の奥深く投げ込まれた運は此の信仰の道を私は喜ばすには居られません。

あまり長くなりすから惜しき筆を止めます。奥様に宜敷御鳳聲被下様願います、來月には御目にかゝる事の出来る喜を樂んで居ります。

す、愚妻より特に宜敷申上て居ります。

▼岐阜縣 行基寺様より

今回の御別時に参加させて頂き自分の増進の上に大いに得させて頂きました御上人の御話を聞く度に深く何物かを植付けらるゝ心もち嬉しき極み幾度でも拜聴致し度思ひ候自分が考へ又は惱み居る点を一々に解かる、如く自分一人の爲めに御話し被下裁考へ自分が御願ひ致したる事を御答へ被下裁にしみる、難有感じ申候力足らざるなれども全分の努力、身を捧げ度、奮發致させられ申候深く御禮申上候御上人には御身御大切に被遊度案じ申上候先は今回の御化導の御禮に併せ申上候内よりもよろしく申上候合掌

▼神戸市 小林シナ様より

私の今日の喜び、先生無かりせばいかで健かに日暮が出来ましよう、何さ感謝して宜しいやう拙き筆や口にはとても言ひ現はず事は出来ません只々南無阿彌陀佛。私一人嬉んでば勿体無いと存じ主人や子供を始め皆様にも嬉んで頂きたいとお集りを願ひしに、子供は折悪しく留守にて惜しき思ひ致し、主人に御面會を願はんご勝手のみ考へ大變おそくなし

まして、皆様は御迷惑相かけました罪淺からず御わびの申様もございませぬ、お蔭様でお話承り主人も打さげくれました事何より嬉しうございませぬ、是を御縁にお話承はらん事を祈つて居ります。

× × × ×

定價 一部十錢 半年六十錢 一年一圓  
振替口座東京四七二八八番 眞生社

東京市芝區芝公園第十四號地九番

編輯兼 土屋 觀道

印刷人 佐藤 忠義

東京市芝區芝公園第十四號地九番

發行所 眞生社

大正十四年八月十三日 昭和二年六月十二日印刷納本 (毎月一回十二日發行) 第六卷第五號  
第三種郵便物認可 昭和二年六月十二日發